

# 絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき

## The Function of Picture Book Images for Suggesting Musical Compositions

小島 千か

Chika KOJIMA

### 1. 音・音楽とイメージの関わり

音楽科教育においてイメージは、鑑賞活動と表現活動の両面に大きく関わっているといえよう。音や音楽から何かをイメージすることは、日常生活の中でも多々あり得ることであり、音楽鑑賞の授業となれば、音楽から何らかのイメージや感想を学習者に持たせることが目指される<sup>1)</sup>。音楽授業の表現活動においては、昭和21年に創刊され、現在まで続く『教育音楽』に掲載された指導事例を検討したところ、イメージが指導の中で一貫して用いられていた(小島, 2005)。それは、より良い表現のためにイメージを関わらせるものと、イメージを基に表現させるものである。前者は、歌唱において歌詞の中で歌われている動物になりきらせて歩かせたり、歌詞の情景について話し合いをさせることにより、イメージを膨らませて歌わせるためのものや、音程を正しく歌うためのハンドサイン、4拍子を感じさせるために、1拍目を大きな○の拍手、3拍目を小さな○の拍手でリズム打ちをさせるなど、音楽的諸要素を感じ取らせるために動きや視覚によるイメージを関わらせるものである。阪井(1998)は、ヴァイオリンの初級者を例に示しながら、演奏において「どんな音を作り出したいか」を自覚的に思い描くために、初心者や子どもの場合は、音楽外的な比喩やそれによる連想によってイメージを表象することが大変有効であるとしている。このように、よりよい表現のためにイメージを関わらせることは、学校教育・専門教育を問わず、音楽教育において重視されてきたといえる。

一方、イメージを音で表現する実践事例は、昭和52年版学習指導要領の時期から多く見られるようになった(小島, 2005)。これは、創造的音楽学習が日本へ紹介された時期と重なる。そして平成元年版の学習指導要領の「音楽をつくって表現できるようにする」(小学校)の中で「自由な発想で即興的に表現すること」が示されたことは、その表現の過程にイメージが大きく関わることとなったといえるだろう。現在、現役の大学生の多くは、この創造的音楽学習の流れを汲む創作活動の内容が示された平成元年の学習指導要領の下で学んでいる。しかし小学校でそうした経験のある学生は少ないようである。小学校教員免許取得を目指す学生が履修する授業において「小学校時代、音楽をつくる活動をしましたか? 経験がある場合は、内容を教えて下さい」というアンケートを行った<sup>2)</sup>。その結果、45人中13人の学生が、経験ありとした。具体的内容として書かれたもので圧倒的に多かったのは、「作曲のコンクールに出品するために曲をつくった」というものである<sup>3)</sup>。その他には、「ことばにリズムをつける」「10秒位の曲づくり」「『鶴の恩返し』にメロディーをつける」などである。「『鶴の恩返し』にメロディーをつける」は、様子を表す音づくりであり、野村・井崎(1995)は、創造的音楽学習の指導法に関する研究としてまとめている。学生の記憶においては、創作活動の経験が少なく、特にイメージをもとに音楽をつくる活動は、今回の回答では『鶴の恩返し』を用いたもののみであった。

以上のように音・音楽とイメージの関わりを見てみると、音楽科教育においては、鑑賞、演奏、創作という3つの音楽行為の全てでイメージを関わらせた指導がなされてきたといえる。しかし、その中で創作に関しては、経験していない大学生が多いことも明らかになった。鑑賞、演奏、創作の全ての行為においてイメージをはたらかせることにより、音楽との関わりが一層豊かになることは間違いなく、教員を目指す大学生が、何らかの形でイメージを基にして音楽をつくる活動を経験する必要があると考えた。

筆者はこれまで、イメージを基にして絵本の絵や内容をより引き立てる音や音楽を付ける活動を授業に取り入れてきた。本研究では、これまでの成果を踏まえて学生有志による創作活動を行い、出来た作品からの考察を通して、絵本を用いた音楽づくりにおいてイメージがどのようなにはたらき、どのような過程を経て音楽作品が生まれるかを提示し、絵本を用いて音楽をつくることの有効性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 絵本と音・音楽の関わり

絵本と音や音楽の関わりに関して、先行研究や実践を見てみたい。絵本を見ていて何らかの音や音楽を感じることがある。河合 (2001) は絵本に内在する音楽性に着目し、そもそも絵本の画、言葉、テーマのそれぞれの中に、音楽的な側面を持っているものがあることを提示している。竹内・奥 (2007, p.36) は絵本に内在する音楽性と同時に、読み聞かせることによって生じる音楽性の存在も示している。絵本に内在する音楽性は、画の背景や構図、タッチ、テーマから引き出されて「イメージ」として現われる場合と、文字の視覚表現、言葉の響きやリズムから引き出されて「音声」として現われる場合があるとしている。読み聞かせでは、語りの声質、音高、リズム、テンポ、ダイナミクスなど音楽的要素が総合芸術としての絵本を形作る、としている。

このように絵本自体に音や音楽を感じさせる要素が含まれているものがあり、読み聞かせる事自体の中に音楽的諸要素が関わり合っているという指摘がある一方で、教育の場では、絵本を基にして音や音楽をつくる活動が行われ、絵本の読み聞かせの場でも音楽を取り入れた実践がある。まず、教育の場では、下出 (1995a,b) や松永 (1992, 1997) が『ころころころ』や『I SEE A SONG』といった視覚的イメージが音や音楽と結びつきやすい絵本を用いて、障害児、小学生、大学生を対象に実践を行っている。三輪 (2008) は、『かいじゅうたちのいるところ』というファンタジー絵本を用いて、幼児を対象とした音づくりを行っており、物語の様々な場面で感じられる「音」を表現させるものである。島崎 (1993, pp.87-93) は、オノマトペを反復的な音楽であるパターン・ミュージックに発展させている。『もけら もけら』を用いており、オノマトペの語感を様々な打楽器で表現させ、それを言葉だけ 4 回、楽器だけ 4 回、言葉と楽器を重ねて 4 回など、演奏形態に変化を持たせながら、反復して演奏させている。

読み聞かせに音楽を取り入れている実践としては、伊藤 (1996) が絵本のストーリー展開が反復を基調としている絵本に音楽を付けており、「言葉にメロディーを付けて歌にする」「場面転換の部分に歌を入れる」「読み聞かせのBGMとして音楽を付ける」などの方法を用いている。その他、絵本ライブとして、ギターの弾き語りで絵本を歌う実践 (杉山, 2004, 2007) や絵本パフォーマンスとして、絵本のBGMをキーボードで作曲し、それをラジカセで流しながら読み聞かせを行う実践もある。

以上が先行研究や実践の中に見る絵本と音や音楽の関わりである。絵本には、それ自体に音楽的な要素を含むものがあり、教育の場において絵本を基にして音楽をつくる実践では、主に音やリズムがつくられ、リズムをパターン・ミュージックに発展させているものもあった。一方、読み聞かせの場では、絵本に「メロディー」が付けられて、歌やBGMとして演奏されている。

## 3. 研究実践の概要

これまで教職関連の音楽授業<sup>4)</sup>において、絵本に音楽を付ける活動を取り入れてきた (小島, 2007)。使用楽器は、音色の変化等も可能にする電子ピアノで、絵本の読み聞かせの場での実践 (伊藤, 1996) を参考として、広く絵本からのイメージを音や音楽にしていくものである。伊藤は、反復を基調とした絵本を用いて、一つの絵本に一つの歌を作り、それを絵本の繰り返しに合わせて歌っていくことにより盛り上がるという。しかし、教員養成における創作活動として考えた場合、繰り返しのよ

る盛り上がりと共に、反復による変化も重要な要素と考えた。創造的音楽学習の登場以降、創作の活動で、一つのメロディーをイメージに合わせて変化させるような活動が見られるようになったからである。絵本を用いた活動においても、繰り返すだけでなく変化にも着目すれば、その変化に対するイメージで音楽表現ができるのではないかと考えた。そこで反復と変化に着目して筆者が絵本を選び、2～3人のグループで創作させ、出来た作品は子ども達の前で発表させた。これは音楽つくることだけでなく、子ども達の前で発表するというパフォーマンスの経験をさせることも考えた活動であったため、グループでの創作であった。

今回の研究実践では、個人のイメージに着目し、教員養成の音楽づくりとして絵本を用いることの有効性を明らかにすることを目的としたものであるため、有志の学生を募って、個人での創作活動を行った。ここでは、学生からより自由に絵本を選んでもらえるために、これまで用いてきた絵本も含め、絵本のストーリー展開に何らかの反復と変化を含むものを基本として、広く音楽が付けられそうな絵本を60冊程度用意した。募集の結果8名（音楽教育専修の大学院生1名と他専修の学部生7名）が集まり、2008年2月から3月にかけて、2～3回集まって音楽をつくってもらった。電子ピアノが20台ある部屋で、各自ヘッドホンを使用しての創作であった。これまでの実践において明らかになっていた絵本に音楽をつけるのに有効な以下の2つの方法については伝えた。

- (1) テーマとなる一つのメロディーを作り、そのメロディーを絵本の登場物や場面のイメージに合わせて変化させる
- (2) 絵本の登場物や場面からのイメージを音楽や音で表現する

また、これまでの授業実践で学生がつくって子どもたちの前で絵本の読み聞かせと共に発表した時のVTRを見せたが、今回は子どもに「見せる・聴かせる」ことを意識せずに、純粹に絵本からのイメージで音楽をつくることだけを考えるように伝えた。

#### 4. 音楽をつくる出発点

学生達は、どのように絵本からのイメージを音楽にしたのであろうか。絵本の何処に着目し、どんな音楽的アイデアを用いてつくったのだろうか。音楽をつくる出発点としての着想の源について、つくられた音楽から考察すると「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の6点が明らかになった。8人が選んだ絵本とその音楽をこの6観点に分類して提示する<sup>5)</sup>。表1は8人が選んだ絵本名と性別、ピアノ経験の有無である。

表1 8人が選んだ絵本名・性別・ピアノ経験の有無

絵 本 名	性 別	ピアノ経験
いちにのさんぽ、ぼくのくれよん	女	有
おかあさんのパンツ2、とんとん どんどん	女	有
おちばがおどる	男	無
おどります、もこもこもこ	女	有/音楽教育
きよだいな きよだいな	男	有
しろいうさぎとくろいうさぎ、まめうし、ちもちも	女	有
なんでしょ なんでしょ、ZOOM	女	有
ぶちぶち	男	無

##### (1) 言葉

武田(2006, p.9)は、赤ちゃん絵本を3歳位までの乳幼児を対象とし、はじめて絵本を見る子どものために作られた絵本を示す名称としている。村川(2002, p. 263)は、「子どもの文学体験としても、

養育者と愛情関係を築くためにもメロディーやリズムのある言葉で育てられることは大切である」と説明している通り、赤ちゃん絵本の言葉は、リズムカルで繰り返されるものが多い。このような、リズムカルな言葉に着想を得てつくられた音楽の例として、まず『いちにのさんぼ』を用いたものを示す。『いちにのさんぼ』は、女の子が「いちに いちに いちにの さんぼ」と歩いて行き、「さんぼ あるいて こんにちは」と言って、様々な生き物に出会う。まずは「ありさん ありさん こんにちは いっしょに おさんぼ しましょうか」と蟻に出会う。出会った生き物は、女の子の後ろから続いて一緒に散歩することになる。積み重ねの手法<sup>6)</sup>である。出会う生き物は、蟻の次は犬、熊、恐竜と続く。「いちに いちに いちにの さんぼ」「さんぼ あるいて こんにちは」の反復の部分では毎回〈譜例1〉をテーマメロディーとして弾いた。「いちに いちに」と歩くリズムが聞こえてくるような付点のリズムの音楽である。

『おちばがおどる』は、茶色を基調とした落ち葉に目、鼻、口がついて顔になり、何枚かの落ち葉が組み合わされて手、足、胴が形作られている。その落ち葉の生き物たちが、風によって舞い上がったり、下りたり、様々に動いている様子が描かれている。言葉は、どれも短く韻を踏んでいる。「ぼくらは おかしな おちばだよ」の言葉は、2回出てくるが、そこには同一のメロディーが付けられている〈譜例2〉<sup>7)</sup>。

## (2) 絵

絵本とは、絵を主体とした児童用の読み物（広辞苑第6版）であることを考えると、つくられた音楽はどれも当然、絵から何らかの着想を得ていると考えられる。ここでは、特に絵に着目したと話した学生の作品を取り上げる。

『とんとん どんどん』は、反復による言葉（ほとんどがオノマトペ）と、その一文字に濁点や半濁点を付けて変化させた文字を見開きで対比させて、それぞれに見合う絵と共に示している。「かたをとんとん」とおばあちゃんが、ゴリラの背中を叩いている絵があり、隣頁では「むねを どんどん」と、その2人が胸を叩いている絵である。ここに《かたたたき》のメロディーの前半を高音で、後半を低音で重く演奏した。これは2つの絵の違いに合わせて、絵に関連のある既成の曲をアレンジしているといえる。

『おどります』は「〇〇がおどります」と様々な動物が何かを持って立っている絵と、持っていたものを腰や頭や首に巻いて「メケメケ フラフラ」と踊る見開きが繰り返される絵本である。各動物が踊っている場面には、テーマメロディーとして〈譜例3〉を付けた。このメロディーは絵が表すフラダンスのイメージからつくったそうである。

## (3) 動物

『いちにのさんぼ』のテーマメロディー〈譜例1〉は、新たに散歩に加わる動物の特徴に合わせて右手の音の高さに変化が加えられた。蟻では出だしの音を1オクターブ引き上げ三点ホ音の高音から始めた。犬では、一点口音から始め、G-durで演奏された。

『なんでしょ なんでしょ』はペンギンが砂浜で棒切れを持って様々な生き物の形を途中まで描き

ながら「なんでしょ なんでしょ」と問いかけるような見開き2頁と、その答えの生き物が見開き2頁に大きく登場する場面が繰り返される絵本である。蛙が出て来た場面では《かえるの合唱》をアレンジした音楽が付けられた。蛸が出て来た場面では、その特徴を表すような音形をつくった〈譜例4〉。

『おどります』では、様々な動物が登場する度に、その動物の感じや特徴に合わせてテーマメロディー〈譜例3〉の音色、音高、テンポ、伴奏型等を変化させている。時にはテーマメロディー自体がアレンジされ、例えば馬の場合は音色をChurch Organに変え、伴奏型を馬の蹄を意識したような〈譜例5〉にした。蛸の場合は、テーマメロディーを半音階で埋めて、蛸のヌルヌルした感じを表現した。

以上のように、音楽づくりの着想の源が「動物」にあると考えられる音楽は、動物の特徴を音で表す、テーマメロディーを動物の特徴に合わせて変化させる、既成の音楽をアレンジするといった方法でつくられた。人々の動物に対するイメージは、ある程度共通しており、例えば象であれば、「大きくて重くてゆっくり歩く」などは誰でもイメージすることであろう。このような動物に対するイメージを音高や速度、音色等に反映させて音や音楽をつくったり、音楽に変化が加えられた。



#### (4) オノマトペ

オノマトペとは、擬音語・擬態語の総称である。後路(2005)は、擬音語を音を言語化したという意味で「音ことば」、擬態語を「様子ことば」としている。それらは直接、音や動きのイメージと結びつきやすく、音やリズムとして実際に表しやすいものである。

『なんでしょ なんでしょ』の蛸の場面には「なぬら にゆなら」というオノマトペが書かれており〈譜例4〉はオノマトペからの発想もあったといえよう。

『おどります』のテーマメロディー〈譜例3〉は、「メケメケ フラフラ」に当てはめた音型である。

『ぶちぶち』は、豆が莢から飛び出して笑顔で歩き出す。途中で花の中に入ったり、花の中にいる虫に飛ばされたり、鶏や蛙に出会ったり、転がったりして最後には土の中で芽が出るお話である。そして豆の様々な動きや状況、気持ちに合わせたオノマトペが書かれている。オノマトペによる赤ちゃん絵本である。オノマトペの語感をそのまま音にしたものが多くつくられた〈譜例6〉。

『おちばがおどる』には、様々な様子を表す言葉がオノマトペと共に示されている。「わさわさ あつまり」の言葉と共に、9枚の落ち葉が、ピラミッド型に重なっている絵があり、隣頁には、「しゅわっと はじける」の言葉で、5枚の落ち葉が手や足を広げて(落ち葉や枝で作られたもの)宙に舞い上がっている絵のある見開きには、〈譜例7〉が付けられた。「けらけら くるくる」のオノマトペに3枚の落ち葉が両手を広げて笑顔でポーズをとって、隣頁は「にこにこ ゆるゆる」に、やはり3枚の落ち葉が笑顔でいる見開きには、〈譜例8〉を付けた。これは、反復によるオノマトペの語感と音の動きが一致している。

『おかあさんのパンツ2』は「○○のパンツ。おかあさんがはいたら、」の言葉と、隣の頁に女の子が絵のついたパンツを穿いて立っている後ろ姿が描かれ、頁をめくると、「○○になった!」の言葉と巨大なお尻(パンツ)が出てくる。つまり、お母さんが穿くとパンツが広がって絵も変化するという設定で、見開き2頁で様々なバージョンが繰り返される絵本である。

「おしりにポッチリいちごのパンツ。おかあさんがはいたら、」の言葉があり、隣の頁に、女の子が苺の絵のついたパンツを穿いて後ろ姿で仁王立ちしている部分には〈譜例9〉を、頁をめくると、「ゴ

「ローン！ すいかになった！」の言葉があり、隣の頁に、お尻がどアップになって、パンツの絵が苺から西瓜に変わる部分には〈譜例10〉を付けた。〈譜例9〉は、Vibraphoneの音色を用いており、苺やオノマトペ「ポッチリ」のイメージからつくったという。〈譜例10〉は、《すいかの名産地》のメロディーの一部を低音で弾いており、大きな西瓜とオノマトペ「ゴロロン」のイメージからつくったそうである。また、「スーイスイ つばめのパンツ。おかあさんがはいたら、」の言葉があり、隣の頁に、女の子が、ツバメが飛んでいる絵のパンツを穿いて両手を広げて片足挙げて、鳥が飛んでいるような後ろ姿で立っている部分には、「スーイスイ」から発想した〈譜例11〉を、頁をめくって、「ペタペタ！ ペンギンになった！」の言葉があり、隣の頁にペンギンのついたパンツがどアップになっている部分には、〈譜例12〉を付けた。伴奏型が「ペタペタ」というペンギンの感じを表している。

以上のようにオノマトペに着想を得ている音楽は多い。それらは、オノマトペの語感をそのまま音にしたもの、オノマトペの語感をモチーフにして短いフレーズの音楽にしたものがあつた。そしてオノマトペ単独ではなく「絵」からの印象やオノマトペの結びついた様子と合わさって、音や音楽をつくる出発点となっているといえる。

譜例 6  
Suz.  
ふちっ ふちぶち ぼーん とん

譜例 7  
Suz.  
cresc. e accel.

譜例 8  
Suz.  
たん たん とん とんとん

譜例 9  
Vibraphone

譜例 10  
Piano

譜例 11  
Piano

譜例 12  
Piano

##### (5) 展開

『きよだいな きよだいな』は、「あつたとさ あつたとさ ひろいのつばらどまんなか きよだいな ○○○ あつたとさ」の○○○がピアノ、石鹸など脈絡なくつづき、それに対応して「こどもが100にんやってきて〜」○○○との関わりで意外な展開がある。つまり○○○の部分が変わって、100人の子とも○○○の関わりは変化するが、同じパターンの繰り返しである。「あつたとさ あつたとさ〜」の文章に巨大な○○○が見開き2頁に示されて、次の見開き2頁に「こどもが100にんやってきて〜」の文章とそこでの活動の絵が示されるという繰り返しである。三宅 (1997, p.92) は、ノンセンス絵本の成功作としている。この絵本を選んだ学生は前奏を作り〈譜例13〉、話の繋ぎ的な音楽が欲しいと言って「あつたとさ あつたとさ〜」を読む前に〈譜例14〉を、「こどもが100にんやってきて〜」を読む前に〈譜例15〉を入れた。これらは、物語の展開を促す音楽と捉えることができると考

えた。

『いちにのさんぼ』では〈譜例16〉のような前奏がつくられた。

『ぼくのくれよん』は、象がクレヨンで色々を描くお話で、例えば、象が青いクレヨンで描いたものを、蛙は池だと思って飛び込むが、池ではなかったのでびっくりする、というようなノンセンスである。「これは くれよんです。でもね この くれよんは」と、最初にクレヨンの説明が数頁ある部分には〈譜例17〉を付けた。この部分を本題に入る前の部分と考えて音楽をつくったようである。

以上の音楽は、読み聞かせを意識したものかもしれないし、自分の絵本鑑賞として音楽を必要と感じたのかもしれないが、絵本の展開を促す音楽をつけるという発想があったといえよう。

#### (6) 気持ち

『しろいうさぎとくろいうさぎ』では、2つの旋律が交互に反復して用いられた。この絵本は、白兎と黒兎が一緒に様々な遊びをしている中で、黒兎が座り込んで、とても悲しそうな顔をする

場面が繰り返し出てくる。白兎が「どうしたの?」と訊き、黒兎が「うん、ぼく、ちょっと 考えていたんだ」という言葉が毎回繰り返される。遊んでいる場面に〈譜例18〉、悲しそうな顔をする場面に〈譜例19〉を付け、話のBGMをつくった。

『ぼくのくれよん』の「でもね、こんなに大きいのです」の部分〈譜例17〉は気持ちを表す効果音といえるだろう。

「絵」の項でも取り上げた『とんとん どんどん』には、「みつばち ぶんぶん」という言葉に蜜蜂が花の上を飛んでいる絵があり、隣頁には「おこった ぶんぶん」という言葉に蜜蜂が正面を向いて花の上で怒っている絵がある。ここに、『ぶんぶんぶん』の出だしの最初の4小節を高音で軽く弾き、その後それを低音で短調で弾いた。「おこった」という感情を短調に表したといえるだろう。

以上、音楽をつくる出発点に着目し、学生がつくった音楽作品を、着想の源として挙げた「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の6観点に分類して考察した。今回の実践でつくられた絵本の音楽は、この6観点のどれかを出発点としており、さらに一つの絵本の中でも、複数の観点により着想を得て音楽がつくられているものが多かった。この6観点は、音楽をつくる出発点となる可能性のある要素であるといえよう。

#### 5. イメージのはたらき

須永(1991)は、イメージのはたらきを、われわれの内側にある「概念」の世界を、われわれ自身が存在する実体の世界へ翻訳することであるとしている。そして彼は、「概念世界」と「実体世界」の

間に「モデル世界」を置き、イメージのはたらきをデザイナーの仕事为例に示している。「概念世界」とは、デザイン・コンセプトであり、デザイナーが課題を与えられてデザイン対象の「在り方」に関する最初の意図を持つ部分だとしている。「モデル世界」は、「概念世界」の意図が言葉や描画等に翻訳され、目に見えるデザインの行為が始まった部分であるとしている。ここで表現されたものは、「実体世界」での模型つまりモデルであり、モデルという形で「表現」し、表現したものを「経験」することにより、モデルが再び「概念世界」に翻訳され、そこで新たな考えが生み出されるとしている。そしてこの「概念」と「モデル」の間に生まれる往復運動の結果、現実としての「実体」が生み出されるとしている。「実体世界」は現実の存在するものごとである。この「概念世界」から「実体世界」への翻訳と、「概念世界」と「モデル世界」の往復運動が、イメージのはたらきだとしている。

では、須永の理論に今回の実践結果を当てはめて考えてみたい。まず「概念世界」は、絵本を基に音楽をつくるには、どんなことができそうかと考えた着想の部分であると考えることができる。これまで見てきた通り、今回の事例からは着想の源として「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の6点が明らかになっている。「モデル世界」では、「概念世界」の着想が実際の音や音楽として表現される。表現された音や音楽は、表現者自身が聴き、吟味されることにより、新たな「概念世界」が形成され、また新たな表現が生み出されるという往復運動が生じる。その往復運動を掌るのがイメージのはたらきである。表現の方法としての音楽的アイディアに関しては、最終的な作品から見ると「言葉を歌やメロディーにする」「音階や和音を基につくる」「オノマトペの語感を音にする」「音楽的諸要素を変化させる」「短いフレーズの音楽をつくる」「既成の曲をアレンジする」「効果音」の7種類のアイディアが考えられる。「概念世界」にある着想と「モデル世界」の音楽的アイディアの間の往復運動によるイメージのはたらきの結果、音楽作品が生まれることになるといえよう。以上の構造図として、須永 (1991, p.15) の「イメージが翻訳する3つの世界」を参考に作成した「絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき」を示す (図1)。

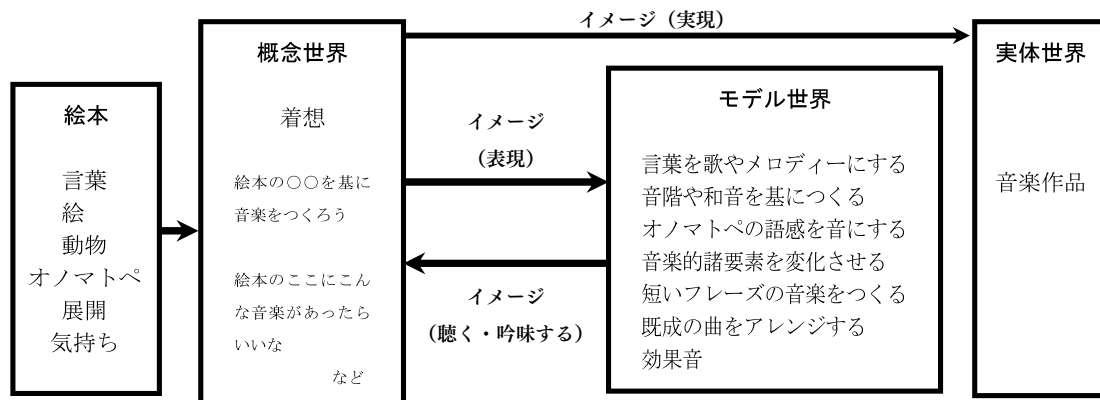


図1 絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき

## 6. 学生のアンケートから

「小学校の音楽授業で、イメージを音楽で表すことをテーマとしてやってみたい内容を書いてください」と示して、最初に自由に書いてもらった。複数名が記載した内容として、「物語に音楽をつける」は8人中4名、「何らかのテーマ（季節や場面、感情等）を音で表現する」は8名中6人が書いており、このどちらか一方もしくは両方を全員が書いていた。そして活動後にもう一度同じ質問をしてみた。絵本を基に音楽つくる活動を行ったことにより新しいアイディアが生まれるのではないかと考えたか



らである。しかし、特に新しいアイデアは生まれず、感想が書かれていた。肯定的なものでは、「動物のイメージや場面から受けるイメージなど、ぱっと浮かんでくるイメージがあり、音をそのイメージに添わせていくという体験をすることができた」があり、否定的なものでは、「イメージはあるが演奏技術が足りず思い通りに表現できなかった」が8名中2人、「イメージを音楽にする段階での音楽的アイデアがいつも同じ、まとまらない」が各1名ずついた。しかし、それらの学生たちもこの活動を行った事自体には、達成感を持ったようで「自分だけの絵本という感じを得てとても楽しかった」などの意見があった。

その他、注目すべき意見についていくつか考えてみたい。この学生は活動前には、「国語の教科書にある話に音をつける」アイデアを書いていたが、擬音語の絵本『ぶちぶち』に音を付けた後では「台詞を音にするのと、そのページにあったメロディーを作るのではかなり違った。擬音語の音化は意外と苦労するところであることが分かった」の感想を書いた。これは、台詞を歌にした学生の作品と自分のものを聴き比べた結果であるといえる。一人だけ活動後に新たなアイデアを示した学生の意見は、鑑賞の授業として「短いフレーズの曲をいくつか用意して、イラストや写真を用意し、自由に組み合わせる（この曲はこんな感じ）」というもので、音楽をつくる活動ではないが、彼女自身が、短いフレーズの様々な音楽を創作したことにより考え出されたものであると考える。また、これまでの経験が創作にとっても影響していることを2名の学生が書いた。それは、様々な音楽を聴いたり色々な楽器の音色を聞き慣れていないといけないといった、聴取面での重要性である。更に「もう一度この活動を行うとしたら、どのような絵本を基に音楽をつくりたいか」を質問したところ、多くの学生が、「今回自分が行わなかったようなタイプの絵本」とし、音楽のつくり方についても具体的に答えてくれた。今回の活動によって、絵本のような音楽外的要素に対する何らかのイメージから音楽をつくる活動において、どのような要素にどのような方法で音楽をつけることができるかについて、理解はできたといえよう。

## 7. まとめ

絵本には、音楽をつくる出発点となる要素があり、今回の事例からは最初の着想の源として「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の6点が明らかになった。そして最初の着想から実際の音楽作品として実現させるのがイメージのはたらきであった。しかしその過程には表現し、表現したものを聴きながら吟味する部分があった。着想と音楽的アイデアの往復運動で、イメージのはたらきによるものである。音楽的アイデアに関しては、「言葉を歌やメロディーにする」「音階や和音を基につくる」「オノマトペの語感を音にする」「音楽的諸要素を変化させる」「短いフレーズの音楽をつくる」「既成の曲をアレンジする」「効果音」の7点が明らかになった。学生の感想に「イメージはあるが演奏技術が足りず思い通りに表現できなかった」というものがあったが、音楽的アイデアを豊富に持っていることが重要であるといえよう。

坪能(2008, p.30)は、小学校での音楽づくりにおいて、物語や具体的なイメージに合わせた音を工夫する、といった活動があるが、子どもたちのつくり出したものが音や効果音でしかない場合が多いことを指摘としている。今回用いたような何らかの反復と変化を含む絵本を用いると、一つの絵本から様々な音楽をつくることができた。音や効果音にもなれば、メロディーにもなるのである。教員を目指す学生にとって、絵本を用いて音楽をつくることの有効性は、様々な方法で音楽をつくる経験が出来るということにあるといえよう。そして、この有効性を充分活かすためには、音楽経験の少ない学生に対して、音楽的アイデア豊富に持たせるための指導を行っていく必要がある。

今回の活動において、音楽を聴くことの重要性を認識した学生がいた。また多くの学生が、次回は今回自分が用いなかったような絵本を基に音楽をつくってみたいと、その音楽的アイデアも含めて

語ったということは、他者の様々な作品を聴くことから生まれたと考えられる。今回のような創作活動では、概念である着想を実際に音や音楽として表現し、それは表現者自身で聴かれ、吟味されることにより新たな表現となることを繰り返す。つまりここでも聴くことが重要な役割を果たしている。更にその表現することと、聴き、吟味することの間を掌っているのがイメージのはたらきである。音楽の表現と聴くことにイメージが大きく関わっていることと、創作には、様々な鑑賞活動を関わらせることの重要性が改めて明らかになったといえよう。

#### 註

- 1、小島 (2008) で考察している。
- 2、2008年度前期「初等音楽科教育学」の授業において行ったもの。
- 3、山梨県では昭和32年から、山梨県下の小学校5、6年生と中学生を対象に「創作力くらべ」という作曲のコンクールが行われている。そのことを書いた学生が多かった。課題内容は、「詩に合うメロディーを創作する」「2小節の課題テーマを発展させて、メロディーを創作する」の2種類である。
- 4、この授業は、幼稚園や小学校での音楽教育における実践的な能力を身につけるために、コードネームの付された楽譜を見ての弾き歌いをメインとしたものである。
- 5、学生によって創作した数が異なる。1冊から3冊の絵本を基に音楽がつくられており、本稿での考察では、各学生1冊ずつは取り上げ、それ以上創作した学生の作品については、特徴的なものだけを提示した。
- 6、積み重ねの手法は、瀬田 (1985, p.149-150) が、伝統的なお話のコツとして示している。彼はこの手法を『くまさんにきいてごらん』で説明している。母親への贈り物をするために、少年が様々な動物に相談する。小さな動物から大きな動物へと積み重ねができていくとしている。その際、動物のしぐさと贈り物の種類で変化がおこる。つまり、ここに反復と変化があり、子どもは反復のところで小さな期待を満たされ、変化のところで驚きがあり、このさきはどうなるかという未知の興味をおこす、というものである。そしてこのような積み重ねの手法にはリズムがあり、一ラウンドずつ自然な呼吸でまわっていくような、快適な運動感が出てくる、としている。
- 7、譜例2は言葉とメロディーが一致しないが、言葉に着想を得ていると考えた。その理由は、この学生がつくった音楽は効果音的なものが多かったが、2回ある「ぼくらは おかしな おちばだよ」の言葉の部分には、旋律的なもの (譜例2) が付けられたからである。

#### 引用・参考文献

- 伊藤義明 (1996) 「絵本をうたう」『月刊 音楽広場』2月号とじこみ研究特集。
- 後路好章 (2005) 『絵本から擬音語擬態語おちぶちぼーん』アリス館。
- 河合隼雄 (2001) 「絵本の中の音と歌」『絵本の力』岩波書店, pp.13-43。
- 小島千か (2005) 「戦後の小学校音楽科における授業実践の変遷—『教育音楽』の指導事例の検討を通して—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第7巻1号, pp.143-152。
- 小島千か (2007) 「絵本と音楽—子ども図書室での学生による発表を通して—」『教育実践学研究』(山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要) No.12, pp.1-12。
- 小島千か (2008) 「音楽鑑賞の指導と評価に関する実践的研究—西洋音楽における音楽の諸要素と視覚的イメージの関連に着目して—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.5 no.2, pp.142-149。
- 阪井恵 (1998) 「表現におけるイメージの働き」『学校音楽教育研究』第2巻, 日本学校音楽教育研究会, pp.57-59。
- 島崎篤子 (1993) 『音楽づくりで楽しもう!』日本書籍。
- 下出美智子 (1995a) 「知的障害児の表現活動における言葉、動き、音の関連性—(第1報)『絵本から音楽を作ろう』という授業の分析を通して—」『教育方法学研究』第21巻, pp.149-157。

- 下出美智子 (1995b) 「知的障害児の曲づくりにおける表現発展の道筋—(第2報)『ころころころ』の絵本から、音楽を作ろうという授業の分析を通して—」『大阪教育大学紀要 第V部門』第44巻 第1号, pp.93-102.
- 須永剛司 (1991) 「デザイナーのイメージ」箱田裕司編著『イメージング—表象・創造・技能—』サイエンス社, pp.12-39.
- 瀬田貞二 (1985) 『絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集—』福音館書店.
- 棚橋美代子、阿部紀子、林美千代 (2005) 『絵本論—この豊かな世界—』創元社.
- 竹内唯、奥忍 (2007) 「絵本の中の音楽—画・言葉・テーマとの関連に着目して—」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻, pp.27-37.
- 武田京子 (2006) 『絵本論』ななみ書房.
- 野村幸治、井崎明 (1995) 「創造的音楽学習の指導法に関する研究—『鶴の恩返し』の授業分析を通して—」『教科教育学研究』第13集, pp.63-76.
- 松永洋介 (1992) 「低学年における視覚的イメージを媒介とした創造的音楽学習—絵本や紙芝居を用いた音楽づくりの実践を通して—」『大阪教育大学紀要 第V部門』第41巻 第1号, pp.145-156.
- 松永洋介 (1997) 「小学校教員養成における音楽科教育の目的と内容に関する一試案—再生表現と創作表現の両面に着目して—」『実践学校教育研究』第1号, pp.15-24.
- 三宅興子 (1997) 『日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」のはたした役割—』ミネルヴァ書房.
- 三輪雅美 (2008) 「幼児期における音楽的表現の発生に関する一考察」平成20年度 岐阜大学大学院教育学研究科 音楽教育専修修士論文.
- 村川京子 (2002) 「第13章 子どもがはじめて出会う本」『はじめて学ぶ日本の絵本史III—戦後絵本の歩みと展望—』ミネルヴァ書房 pp.262-279.

#### 使用絵本

- あきやまただし (1997) 『まめうし』PHP研究所.
- イシュトバン・バンニャイ (2005) 『Zoom ズーム』ブッキング.
- いとうひろし (2003) 『おちばがおどる』ポプラ社.
- 高島純 (2004) 『なんでしょ なんでしょ』アリス館.
- 高島純 (2005) 『おどります』絵本館.
- 谷川俊太郎、元永定正 (1977) 『もこもこもこ』文研出版.
- 長新太 (1993) 『ぼくのくれよん』講談社.
- 中川ひろたか、村上康成 (2003) 『とんとん どんどん』PHP研究所.
- 長谷川摂子 (1988) 『きょだいな きょだいな』福音館書店.
- ひろかわさえこ (1999) 『いちにのさんぼ』アリス館.
- ひろかわさえこ (2000) 『ちもちも』アリス館.
- ひろかわさえこ (2000) 『おちぶち』アリス館.
- 山岡ひかる (2005) 『おかあさんのパンツ2』絵本館.
- Williams, Garth. (1958) *The rabbits' wedding*, New York  
(=1965 まつおかきょうこ訳『しろいうさぎとくろいうさぎ』福音館書店)

#### 参考CD

- 杉山三四郎 (2004) BIG, BIG TREE 杉山三四郎 絵本をうたう…
- 杉山三四郎 (2007) あなたがいるから 杉山三四郎 絵本をうたう2

付記 本稿は平成19年度学内戦略的プロジェクトによる研究成果の一部である。